

銅銭の铸造

古代の銭貨は、「鑄銭司」という銭貨をつくる専門の役所でつくられました。近年、飛鳥池遺跡での富本銭の鑄銭工房、平城京内での小規模鑄銭工房の発見などにより、鑄銭司以外でも銭貨の鑄造が行われたことが、知られるようになってきました。

銭貨をつくった役所 鑄銭司

鑄銭司とは、鑄銭のために置かれた令外の官*です。長門・山城・周防国などにあったことが知られています。

*令に規定されていない役所

鑄銭司関係の主な記事

694年	大宅朝臣麻呂など3名を鑄銭司に任命
699年	はじめて鑄銭司を置く
708年	はじめて催鑄銭司を置く
709年	河内鑄銭司を寮に準ずる扱いとする
730年	周防国の銅を長門の鑄銭にあてる
735年	更に鑄銭司を置く(岡田鑄銭司か?)
767, 769年	田原鑄銭司の長官の任命
782年	鑄銭司の廃止
790年	また鑄銭司を置く
818年	長門国司を鑄銭使に改編
825年	長門国の鑄銭使を停止し、新たに周防国に鑄銭司を設置
827年	鑄銭司が岡田にあった時にない、周防鑄銭司に医師1名を置く
865, 867年	「山城国相楽郡岡田郷旧鑄銭司」で採銅を行う
870年	山城国葛野鑄銭所で鑄銭を行う
940年	天慶の乱により、周防鑄銭司が焼失

長門鑄銭司

設置時期：730年頃

山口県下関市覚苑寺内からは、和同開珎と和同開珎鑄造遺物(鑄型、鞆羽口、坩堝)が発見され、長門鑄銭司跡と推定されています。

岡田鑄銭司

設置時期：735年?~(827年までには停止)

京都府木津川市加茂町錢司遺跡からは、和同開珎と和同開珎鑄造遺物(銅滓、鞆羽口、坩堝)が発見され、岡田鑄銭司跡と推定されています。

周防鑄銭司

設置時期：825年?~?

山口県山口市鑄銭司字大島・四辻遺跡からは、長年大宝、鞆羽口、坩堝などが発見され、周防鑄銭司跡と推定されています。

総合工房での銅銭の鑄造

律令以前の官営工房は、さまざまな手工業の工房が一箇所にまとめられていたと考えられています。奈良県飛鳥池遺跡では、富本銭の鑄造工房の他に、金銀、ガラス、仏像、瓦などをつくった工房が確認されています。



複数の工房が発見された飛鳥池遺跡



大量に出土した富本銭

平城京内で発見された小規模工房

近年、平城京内において、小規模な鑄銭工房が相次いで発見されています。これらは、貴族の邸宅内に設置された私鑄銭の工房、鑄銭司管理下の工房などとする見解があります。

長屋王邸宅跡出土の種銭

長屋王邸宅跡からは、和同開珎の種銭とみられるものが出土しています。長屋王の邸宅内で鑄銭が行われたと考えられます。

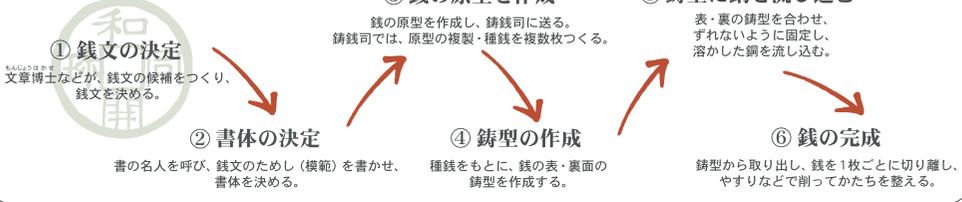
左京三条四坊七坪遺跡出土の「めがね銭」

左京三条四坊七坪遺跡は、和同開珎の鑄型と鑄棒、2個の銭が繋がった状態で発見された通称「めがね銭」などの出土から、鑄銭工房であったと考えられます。



左京三条四坊七坪遺跡出土の鑄造関係資料

銅銭ができるまで



貨幣博物館所蔵の和同開珎鑄造関連資料

山口県下関市覚苑寺からは、和同開珎の鑄造に関連する資料が多数発見されており、長門鑄銭司跡と考えられています。当館所蔵資料の中から、長門鑄銭司跡出土と伝えられる和同開珎の鑄型、鞆羽口、坩堝を紹介いたします。



和同開珎の鑄型



坩堝と鞆羽口



当館所蔵のめがね銭
(出土地不明)

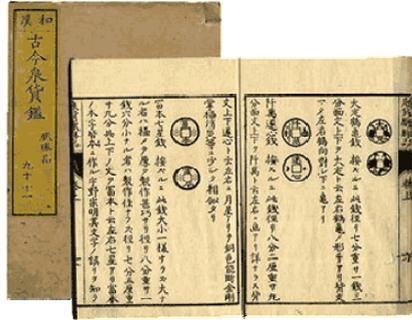
その他の主な展示

【江戸時代の資料にみる無文銀銭・富本銭・和同開珎】

江戸時代中期頃から流行した古銭収集用の図鑑(銭譜)に古代銭貨はどのように扱われていたのでしょうか。

富本銭は、当時としては厭勝銭(まじない銭)として扱われていました。

和同開珎は江戸時代にはわが国最古の貨幣として扱われ、多くの銭譜(収集用の貨幣図鑑)に掲載され、人気がありました。



『和漢古今泉貨鑑』
1798(寛政10)年

富本銭が「厭勝品」に分類され、「富本七星銭」という名称がつけられています。



『和漢古今寶銭図鑑』
1694(元禄7)年

「富本銭」として掲載され、左右の七星が六つになっています。

【古代銭貨の変遷—その成分と大きさ・重さ—】

古代銭貨を並べると、時代を下るとともに大きさが小さくなるのが見て取れます。また、銭貨を成分分析することにより、その鑄造方法や原料の調達地を解明する手がかりを得ることができます。古代銭貨の成分分析については、当館ホームページ(「古代銭貨に関する理化学的研究—「皇朝十二銭」の鉛同位体比分析および金属組成分析—」/金融研究所 Discussion Paper J-Series No.2002-J-30 2002.9)をご参照ください。当館所蔵の和同開珎の詳細についても当館ホームページをご覧ください。

《平安時代に発行された9種の銭貨》



《さまざまな和同開珎の拓本》

当館の所蔵資料は、戦前の貨幣収集界の第一人者といわれた田中啓文氏の収集品(銭幣館コレクション)を譲り受けたものです。当館で所蔵するさまざまな和同開珎の中には、銭貨の鑄造過程をうかがえるものがあります。



鑄銭時に鑄型にひびが入り、その痕が線のように銭の面に出ているものです。



文字がある面のズレは母銭を鑄型に押しつける際、あるいは取り出す際の取り損などにより、生じたものと考えられます。

【和同開珎と古代のくらし—お金のつかいかた—】

和同開珎が発行後、給料は銭貨で支払われました。銭貨を手にした人々は、必要な日常の品々を銭貨で手に入れるようになりました。しかし、万年通宝などの新しい銭貨が発行され、物価は大きく上昇していきました。

《米1升を
買うために必要な
金額の変化》



米1升
現在の
約4合分



約5文
(751-760年)



約11文
(762年)



約30文
(764年)

価値の基準としての和同開珎

これは和同開珎が万年通宝・神功開宝に比べると良質で、高い信用を持ち続けたためと考えられます。772(宝亀3)年に通用が停止される頃まで、和同開珎が基本的な価格の表示単位でした。

《富と権力をもとめて—蓄銭・献銭をするひとびと—

律令国家は、地方豪族や貴族・役人などが蓄えた銭貨を手に入れるため、一定の銭貨を国家に納めることで、位階を与えることを定めました(蓄銭叙位法)。こうして、銭貨を集めることで、位階を持たない人々が有位者となる可能性も出ました。

『日本書紀』にえがかれた銭貨

平安時代初期の仏教説話集『日本書紀』には、人々の借金や盗み・売買や福徳などの様々な生活の場面で、銭貨が登場しています。当時、銭貨がどのように流通し、浸透していたのかを示す好資料です。

サテライト展示「2500年の伝統と技ー中国・日本の鑄銭技術ー」

中国や日本の貨幣は、鑄型に溶かした銅を流し込む「鑄造」技術でつくられました。この技術は、中国で金属貨幣が登場する紀元前8世紀から19世紀までの約2500年の間、使われ続けました。日本貨幣の源流となった、中国貨幣の鑄銭技術を、当館所蔵の中国貨幣とその鑄型から紹介します。

中国のさまざまな鑄型

縦式鑄型

貨幣の表面と裏面の鑄型を合わせ、銅の注ぎ口(湯口)を上にして立てて使う鑄型です。



表 裏
新・大泉五十の鑄型
(新の時代 1世紀)

壘鑄式鑄型

表面と裏面の鑄型を平置きに合わせ、何層も重ねて使う鑄型です。銅は中央の湯口から流し込みます。



梁・五銖銭の鑄型
(魏晋南北朝時代 6世紀)

各時代の貨幣と鑄型



齊法化と鑄型
(春秋戦国時代 前5~3世紀)



秦・半兩銭と鑄型
(秦の時代 前3世紀)



漢・五銖銭と鑄型
(前漢時代 前2世紀~後1世紀)

【展示資料】

和同開珎の時代とくらし

資料名	年代
無文銀銭(複製)	7世紀後半
富本銭(複製)	7世紀後半
和同開珎	708(和銅元)年発行
万年通宝	760(天平宝字4)年発行
神功開宝	765(天平神護元)年発行
隆平永宝	796(延暦15)年発行
富寿神宝	818(弘仁9)年発行
承和昌宝	835(承和2)年発行
長年大宝	848(嘉祥元)年発行
饒益神宝	859(貞観元)年発行
貞観永宝	870(貞観12)年発行
寛平大宝	890(寛平2)年発行
延喜通宝	907(延喜7)年発行
乾元大宝	958(天徳2)年発行
『日本書紀』	720年完成(展示資料は18世紀の複製本)
『日本紀略』	(成立年代未詳)
『旧唐書』「食貨志」	10世紀中頃完成(展示資料は清代の複製本)
大平興宝	970年発行
開元通宝	621年発行
光緒通宝	1875年発行
乾元重宝(高麗)	997年頃発行
朝鮮通宝	1423年頃発行
寛永通宝	1636年発行
『和漢泉貨・上編』	1793(寛政5)年
『中外銭史・二』	1831(天保2)年
『和漢古今泉貨鑑・九十一』	1798(寛政10)年
『和漢古今宝銭図鑑』	1694(元禄7)年版・1696(元禄9)年版
『皇朝銭図・完』	1799(寛政11)年
『懷宝古銭鑑』	1850(嘉永3)年版
『田中会長在任二十年記念泉譜』	1940(昭和15)年
<参考資料>	
銭譜(1頁文譜)	江戸時代
銭譜(100文譜)	江戸時代

資料名	年代
『鼓銅図録』	19世紀初
<参考資料>	
自然銅	—
赤銅鉱	—
黒銅鉱	—
孔雀石	—
藍銅鉱	—
珪孔雀石	—
黄銅鉱	—
斑銅鉱	—
和同開珎	708(和銅元)年発行
和同開珎 銭范	8世紀初
羅羽口	8世紀初
埴塙	8世紀初

サテライト展示「2500年の伝統と技」

資料名	年代
空首布	西周末期(前8~7世紀)
五銖銭	前漢時代(前118年発行)
五銖銭 鑄型	前漢時代(前2世紀後半~後1世紀)
五銖銭 原母范	前漢時代(前2世紀後半~後1世紀)
四銖半兩銭	前漢時代(前175年発行)
四銖半兩銭 鑄型	前漢時代(前2世紀)
四銖半兩銭 原母范	前漢時代(前2世紀)
一刀平五千	前漢末(7年発行)
一刀平五千 原母范	前漢末~新代(7~23年)
大泉五十	前漢末(7年発行)
大泉五十 鑄型	前漢末~新代(7~23年)
大泉五十 原母范	前漢末~新代(7~23年)
貨布	新代(14年発行)
齊法化	戦国時代(前5~3世紀)
齊法化 鑄型	戦国時代(前5~3世紀)
方足布	戦国時代(前5~3世紀)
方足布 鑄型	戦国時代(前5~3世紀)
半兩銭(大様)	戦国末~秦(前3世紀)
半兩銭(私鑄銭)	戦国末~秦(前3世紀)
半兩銭 鑄型	戦国末~秦(前3世紀)
陰文四銖銭	齊代(479~502年)
陰文四銖銭 鑄型	齊代(479~502年)
五銖銭	梁代(557年発行)
五銖銭 鑄型	梁代(502~557年)
『鑄銭図解』(複製)	(原本は18世紀)



ご協力をいただいた機関

(50音順)

大阪市文化財協会
 樺原市教育委員会
 木津川市教育委員会
 国会図書館
 国立歴史民俗博物館
 下関市教育委員会
 太宰府市教育委員会
 東京国立博物館
 東大寺寺務所
 (財) 東洋文庫
 奈良市役所
 奈良文化財研究所
 (財) 前田育徳会
 美東町教育委員会
 山口市教育委員会

日本銀行金融研究所

貨幣博物館

電話: 03-3277-3037(直通)
 〒103-0021

東京都中央区日本橋本石町 2-1-1
<http://www.imes.boj.or.jp/cm>